



七戸藩庁が置かれた七戸代官所跡（中世の七戸城）
（筆者撮影）

いわゆる南部と津軽の対立は弘前藩祖津軽為信が南部氏から独立したことに始まり、1868（明治元）年には両藩が直接野辺地で戦火を交えた。戦後、盛岡藩は13万石に減封のうえ、陸中国白石（現宮城県白石市）に転封となり、弘前藩が現青森県部分の旧盛岡藩領（北・三戸・二戸の三郡）を管轄したこともあった（翌年の2月まで）。

感情の解消に努めようとした。南部家は1869（明治2）年7月に盛岡に復領するが、同年12月12日、弘前藩は藩士大道寺源之進を盛岡へ派遣して、藩知事津軽承昭^{（承昭）}自筆の友好を求め、書簡を手交している。

この書簡では、両藩がこれまで「隔意」（打ち解けない気持ち）があつたのは否定できないが、明治維新後、共に天皇に仕える藩屏となり「一視同仁之叡慮」を受ける身となつたからには、旧怨を氷解し、懇親を復活させ、藩幹部はもちろん、藩士や領民に至るまで和親交際を深めていこうと呼びかけている。

める使者の派遣は、他の周辺の諸藩、秋田藩や松前藩へ向けては見られず、盛岡藩との特殊な関係が見てとれる。

盛岡藩はこれを受けて、同年11月9日、藩士江刺城機と新渡戸七郎を弘前城に派遣し、藩知事南部利恭^{（利恭）}の返書を渡している。なお新渡戸は三本木平開拓で知られる新渡戸伝の嫡孫であり、稲造の兄にあたる人物である。

津軽家、南部家との善隣友好を図る、知られざる明治初期のエピソード

中野渡 一耕

（県民生活文化課
県史編さんグループ総括主幹）

七戸町を藩庁所在地に成立した藩）も友好がはかられる。実は弘前・盛岡両藩は盛岡藩の減封により直接藩領は接しなくなっており、奥羽山脈を挟んで向かい合ふのは分家どうしだったためである。

盛岡藩の使者が弘前を訪れた半月後の11月29日、今度は黒石藩の使者が七戸を訪れ、藩知事津軽承叙^{（承叙）}からの書簡や贈答品を手渡した。

七戸藩は藩庁たる七戸城（旧代官所の建物を再利用した）の整備が十分でなかったため、城下の御用商人濱中屋幾治郎宅を本陣に應對した。黒石藩の書簡は、弘前藩から盛岡藩宛ての書簡を簡略化したような内容であった。

期間の往復を避けたためもあるが、当時の七戸藩が自主的廃藩問題で揺れていたことも理由に考えられる。

黒石藩・七戸藩間の友好締結が本家同士と違うのは、単なる和親だけでなく、通商も奨励する内容だったことである。黒石藩は藩内向けに「七戸藩と和親を取り結んだからには広く通商を結ぶのは自由、また七戸藩領内どこの地に何の商売をするのも自由である」という布達を出している。

一方、七戸藩では黒石藩のような藩内向け布達は見られないが、その後具体的に両藩の友好は進んだのだろうか。大光寺組（現平川市など）の馬調方御用状留帳（県史資料編近世3収録）によると、同年8月に七戸で馬の擲市^{（ちりし）}があるので、津軽領の馬喰^{（ばく）}に参加を呼びかける七戸町検断^{（けんたん）}（町長に相当）の書状が載っている。七戸は名馬の産地であり、黒石藩（とくに平内地方）も津軽領の中では馬産地として知られていた。たしかに両藩の友好締結は一定の成果があつたといえよう。廃藩置県で藩が消滅する1年前のことであつた。